

# サンカクハウス

東京で若者の住まいと居場所づくりをし  
ているNPO法人サンカクシャ（荒井佑介  
代表理事）が昨春、JR山手線沿線に開設  
した「サンカクハウス」。4LDKの建物  
にさまざまな事情を抱えた若者たちが暮ら  
しています。  
（萩野悦子）

「浮草みたいだね。ち  
ゃんとした仕事してわけ  
じゃないし」  
優しい口調ではにかむよ  
うな笑顔を見せる倉本修也  
さん（22）。「仮名」は昨年  
秋に入居しました。

母子家庭で育った倉本さ  
んは中学一年生の冬に母親  
と死別。当時母親が交際し  
ていた男性や、実父とも同  
居した時期がありましたがい  
ずれもうまくいきません  
でした。

「早く自立したい」と高  
校卒業後、保育の専門学校  
を出て保育士となり、都内  
の保育園に就職。ところが  
が一年目の冬、出勤の途中  
でどうしても職場に行くこ  
とができなくなりました。  
しばらく無断欠勤したあと  
にその手を退職しました。

「一年目でも責任の重い  
仕事を任せられるし、人間関  
係が悪くて、すごいストレ  
スを感じていた。なんだか  
もう全部、いやになってし

# 若者BOX

ワカモノボックス



NPO法人サンカクシャの荒井佑介代表理事

「普通に働くのは自  
分にはもう無理だと思っ  
て退職した後は、カラオケ  
店でアルバイトし、奨学金  
や同居していた男性からの  
借金の返済をしていました  
が、コロナ禍で無職。中  
学生時代に知り合った荒井  
さんが、サンカクハウスを  
開設したと聞いてすぐ、入  
居を決意。今は週3〜4  
日、ゴルフ場の受付事務の  
アルバイトをしています。

「ここであれは暮らし  
ていけないよね。食材はあ  
る程度整備されているし、  
家賃が3万円だ、携帯代と  
奨学金の返済も合わせて全  
部で6万あれば、なんとか  
なる」と倉本さんはいいま  
す。

「ここにあえす自分の着る  
ものだけあれば」というの  
は、もう一人の入居者、横  
谷玲児さん（22）。「仮名」

# 若者にコロナ禍寄り添う

## 問題の根に子ども貧困 社会への信頼回復に時間



サンカクシャの居場所でくつろぐ若者たち＝1月18日、東京都内

です。横谷さんも倉本さん  
と同じく安心して暮らせる  
実家のないまま、飲食店の  
アルバイトで生活してきま  
した。コロナ禍で転々と  
し、SNSでつながった人  
からの情報でサンカクシャ  
が運営する居場所に顔を出  
すようになって、サンカク  
ハウスに入居しました。

「実家にはおれの居場所  
はなかった。荒井さんがサ  
ンカクシャの活動をどんど  
ん広げるのを見て、すごく  
尊敬しています。ああいう  
ふうになりたい」という横  
谷さん。スキルがないから  
とあきらめていたパソコン  
の勉強もサンカクハウスで  
できるようになり、「ちゃん  
と働いて食えるようになり  
たい」と先の見通しを立て

られるようになりました。  
家賃3万円です。最低限の生  
活を保障しつつ、くつろげ  
る生活空間と人とのつなが  
りというセーフティネット  
をつくるため、補助金や  
寄付金、スタッフ・ボラン  
ティアの確保に奔走する代  
表理事の荒井さん。

隣にいてあげたい  
学生時代、ホームレス支  
援のボランティアをしたの  
がきっかけで、「問題の根  
っこには子どもの貧困があ  
る」と中学生への学習支援  
活動を始めました。そのこ  
ろ知り合ったのが倉本さ  
ん。荒井さんは「10年近い  
付き合いなんですよね」と  
笑いながら、「最初の職場  
でひどい目にあって、自尊  
心をつぶされてしまった今  
の彼に先のことを考えよう  
というのは酷ですよ。ゆっ  
くりと自分と向き合いなが  
ら再スタートをめざせるよ  
うに、隣にいてあげたい」。

長引くコロナ禍は、多く  
の若者たちから仕事や居場  
所を奪うだけでなく、将来  
の夢を描く力も奪っていき  
ます。  
荒井さんは言います。「子  
どものころから将来のため  
にとせかされて、大人にな  
ってみたらコロナで将来な  
んか吹っ飛んでしまった。  
大人社会に出たとたんに  
『知らない』といわれた彼ら  
が社会への信頼を取り戻す  
には時間がかかります」